資 料

子ども観の研究(1)

—SD法による短期大学生の子どものイメージについて—

木 村 留美子*

A Study of the Image of Children (1)

—The Case of College Students investigated by the Semantic Differential Method—

Rumiko Kimura*

*Kanagawa Prefectural College of Nursing and Medical Technology

はじめに

子ども観は、国の内外を問わず、その時代の社会・経済的な背景によって規定されてきた歴史性を持つものである。我が国の子ども観も児童憲章に代表されるように、戦後の動乱期にあって、何ものにも左右されない真に子どもの幸せを願って制定されたものであり、このような考え方を継承していくことは重要なことである。しかし現代の家族形態や少子化現象、そしてこのことから生じる問題¹⁾は、学生に子どもとの接触の機会を失わせ、子ども本来の姿さえも十分に捉えさせることを困難にしている。これは学生の子ども観の形成にも多大な影響を及ぼしている。とりわけ将来積極的な意図を持って、子どもの成長・発達の保障に関わらなければならない看護の学生にとっては、看護介入を行う際の重要な視点として、学生個々の“子ども観”“育児観”“教育観”等を身につけておくことが重要である。

そこで、近年小児看護学においては、子どもに関する学習から、これらが学生の中にどのように位置づけられ、獲得されているのかといった学習の効果を確認するための調査が行われている^{2,3,4,5,6)}。しかし、得られた結果を教育の中に還元していくための具体的な方法や、方向性を示した研究は散見されるにすぎない。

そこで、本研究では子どもに接する機会の少ない現代の学生に、効果的な子どもの学習を準備するための前段階として、まずは学生の同胞の有無による相違や、専攻の志向性による相違、学習経験・体験等の学生が持っている背景による違いからの子どものイメージの相違を短期大学の学生を対象に調査したので報告する。

調査方法

調査の内容と分析：調査は、Osgood, C. E.⁷⁾の考案によるSemantic Differential Method (SD法)を用い、項目は井上・小林等⁷⁾が子ども観

の測定に有効であるとした51組の形容詞対に7段階の評定尺度を設け、その値をその尺度の得点とした。

調査票には少子化傾向にある家族の形態を考慮し、①同胞の有無と同胞が居ればその状況を、②過去の生活体験や学習経験の中から子どもと親しく関わりを持てたと自分自身で感じられるような経験の有無、そして③子どもが好きか嫌いかといった情動性への回答を求めた。

結果の分析は単純集計、クロス集計、 χ^2 検定、分散分析、因子分析により行った。

被調査者は本学の2年課程の看護学生(1年生157名、2年生159名)と養護の学生(1年生40名、2年生40名)、さらに神奈川県某私立大学短期大学の保育専攻の学生(1年生91名、2年生105名)の合計592名である。

調査は教育の影響を考慮し、1年生では子どもに関する授業開始前に、2年生では授業終了後に調査を行った。回収率100%、有効回答数99.1%であった。

学生の属性は表1に示す通りである。学年別に①～③の変数に従って分類し、比較を行った。

結果と考察

1. 学生の属性

表1は学生の属性を単純比較したものである。それぞれの変数で学年間の有意な差は認められなかったが、子どもに対する否定的な感情や苦手意識は、1年生では18.1%、2年生では19.1%認められた。

表1 学生の属性(%)

	1 年 生 (n = 288)	2 年 生 (n = 304)
同胞		
一人っ子	37(12.8)	37(12.2)
弟妹のみ	127(44.1)	134(44.1)
兄弟姉妹	40(13.9)	39(12.8)
兄姉のみ	84(29.2)	94(30.9)
接触経験		
有 り	242(79.6)	256(84.2)
無 し	46(20.4)	48(15.8)
情動反応		
好 き	236(81.9)	246(80.9)
嫌 い	45(15.6)	57(18.8)
苦 手	7(2.5)	1(0.3)

表2は学生の同胞の有無やその状況と学生の情動反応とを学年別にクロス集計し、その関係をみたものである。 χ^2 検定の結果、1・2年生共に同胞の有無やその状況と情動反応との間には有意差を認めなかった。この結果は、鈴木等⁹⁾が学生の子どもに対する関心度は同胞数や出生順位と関連はないとした報告を支持するものであった。

表3は、学生が子どもと親しい関わりを持ったと感じている経験の有無と情動反応との関係を学年別に比較したものである。1年生では看護の学生($\chi^2=9.904$, $df=1$, $P<.00016$)に、2年生では養護の学生($\chi^2=7.025$, $df=1$, $P<.008$)と看護の学生($\chi^2=15.29$, $df=1$, $P<.00009$)に接触体験の有無と情動反応の間に有意差を認めた。養護の1年生と保育の1・2年生では有意差はみられず、これらの学生の

表2 同胞と情動反応(%)

情動反応 同胞/専攻	好 き			嫌 い			苦 手		
	養 護	看 護	保 育	養 護	看 護	保 育	養 護	看 護	保 育
1 年生									
一人っ子	4(10.0)	16(10.2)	13(14.3)	0(0.0)	4(2.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
弟妹のみ	14(35.0)	47(29.9)	46(50.5)	1(2.5)	15(9.6)	0(0.0)	4(10.0)	0(0.0)	0(0.0)
兄弟姉妹	9(22.5)	15(9.6)	7(7.7)	0(0.0)	7(4.5)	0(0.0)	1(0.03)	0(0.0)	1(1.1)
兄姉のみ	6(15.0)	35(22.3)	24(26.4)	0(0.0)	18(11.5)	0(0.0)	1(0.03)	0(0.0)	0(0.0)
2 年生									
一人っ子	5(12.5)	13(8.2)	11(10.5)	0(0.0)	8(5.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
弟妹のみ	18(15.0)	43(27.0)	54(52.4)	1(2.5)	17(10.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.0)
兄弟姉妹	5(12.5)	14(8.8)	14(13.3)	0(0.0)	6(3.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
兄姉のみ	8(20.0)	36(22.6)	25(23.8)	3(7.5)	22(13.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

1 年生：養護(40名)、看護(157名)、保育(91名)

2 年生：養護(40名)、看護(159名)、保育(105名)

表3 子どもと親しい関わりを持った経験と学生の情動反応(%)

情動反応 接触経験 /専攻	好 き			嫌 い			苦 手		
	養 護	看 護	保 育	養 護	看 護	保 育	養 護	看 護	保 育
1年生 有る 無し	29(72.5) 4(10.0)	99(63.1) 14(8.9)	80(87.9) 10(11.0)	1(2.5) 0(0.0)	29(18.5) 15(9.6)	0(0.0) 0(0.0)	3(7.5) 3(7.5)	0(0.0) 0(0.0)	1(1.1) 1(1.1)
2年生 有る 無し	30(75.0) 6(15.0)	90(56.6) 16(10.1)	104(99.0) 0(0.0)	1(2.5) 3(7.5)	30(19.1) 23(14.5)	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	1(1.0) 0(0.0)

殆どは子どもとの親しい関わりを持った経験の有無に関わらず、子どもが好きだと回答していた。

また、表3に基づいて子どもと親しい関わりを持ったと感じている学生と、嫌い・苦手といった否定的な感情や意識を抱いている学生についてみると、親しい関わりを持ったと感じている学生の中で嫌い・苦手と答えている者は、1年生では養護の学生が10.0%、看護18.5%、保育1.1%で、2年生では養護の学生が2.5%、看護19.1%、保育1.1%であった。親しい関わりを持てたと感じていない学生で、子どもが嫌い・苦手な学生は、1年生では養護7.5%、看護9.6%、保育1.1%、2年生では養護7.5%、看護14.5%、保育0%であった。このように子どもとの親しい関わりを持った経験がある者も無い者も、子どもが嫌い・苦手と答えた学生は、1・2年生共看護の学生に最も多くみられた。子どもと親しい関わりを持てたと感じているかどうかの質問に対する理解や受けとめ方は、1年生と2年生の間では生活体験や学習経験からくる理解や解釈に相違があるとしても、学生の子どもに対する対応のあり方や理解は、その根底に学生の子どもに対する情動性が大きく関与している。特に看護の学生については、山本¹⁰⁾が行った10年前の調査(子どもとの親しい関わりを持った経験があっても子どもが嫌いだと答える学生の数)結果や、同様の鈴木等¹¹⁾の結果と比較すると、本調査から得られた看護学生の子どもへの否定的な感情や苦手意識は非常に高くなっている。このことが冒頭に述べた現代の家族・社会構造に起因するものであるとすれば、現在、小児看護学において行われている子どもの理解や成長・

発達の保障といったことを通して、全ての学生に子どもの特性理解や、子ども観、教育(保育)観を我がものにさせることの困難さをより深く痛感する。従って、今後は母性性¹²⁾、親性¹³⁾等の部分についても更に深く検討を行った上で教育の方法を考慮することが求められる。

2. 学生の属性と子どものイメージ

表4は前述した①同胞の有無と同胞が居ればその状況を、②過去の生活体験や学習経験を通して子どもと親しく関わりを持ったと自分自身で感じられるような経験の有無、そして③子どもが好きか嫌いかといった情動性の3つの変数それぞれについて、51組の形容詞対の尺度値を一元配置分散分析によって分析し、有意差の見られた項目を学年別に比較したものである。

同胞の有無からは、1年生は4項目に、2年生では9項目に有意差が認められた。有意差が認められた項目について、その内容を見ると、1年生では兄弟姉妹の居る者は、一人っ子の者よりも“たくましい”“責任感が強い”といった項目の得点が高くなっていた。2年生では兄弟姉妹の居る者は、兄姉だけの者や一人っ子の者に比べて“好きな”“気持ちの良い”“きちんとした”“責任感の強い”“勇敢な”“思いやりのある”“きれいな”“すばやい”といった項目の得点が高く、子どもを肯定的に、そして活動的に捉える傾向がみられた。これを先の表2の結果と比較すると、表2では同胞の有無やその存在と情動反応との間には有意差を認めなかったが、ここでは2年生になると同胞の居る者とそうでない者との間には相違がみられた。同胞の居る者で、特に兄弟姉妹の居る者はそうでな

表4 分散分析による尺度値の変数別学年比較

項 目	1 年 生			2 年 生		
	①	②	③	①	②	③
1 明るい						1>*3
2 やわらかい	1>*2					
6 静かな			1>***3			1>***3
9 好きな		1>***2	1>***2・3	2・3>***1	1>***2	1>***2>***3
10 良い		1>*2	1>***3			1>***3
11 親切的な			1>*3		1>***2	1>***3
12 鋭い			1>***2・3			
13 気持ちの良い		1>*2	1>*3	2>*1・3	1>*2	1>***2・3
14 頼もしい			1>*3		1>*2	
15 たくましい	2>*3				1>*2	1>*2・3
17 愉快的な			1>***2・3		1>*2	1>***3
19 おしゃべりな					1>*2	1>*3
20 きちんとした				2>*1		1>***3
21 素直な			1>***3			1>***3
22 責任感の強い	1・2>*3			2>***1・3	1>*2	1>***3
23 落ち着いた						1>*3
25 意欲的な					1>***2	1>***3
26 可愛らしい		1>*2	1>***1>*3		1>***2	1>***3>***2
27 のんびりした					1>***2	1>*3
28 勇敢な				2>***1・3		1>*3
29 優しい		1>*2			1>*2	1>***3
30 丸い	1>***2・3					1>*3
32 思いやりのある			1>***3	2>*1	1>*2	1>***3
34 清潔な					1>***2	1>*3
35 元気な					1>*2	
36 幸福な			1・3>*2		1>***2	1>***3
37 敏感な			1>***2・3			
39 楽しい			1>***2>*3		1>*2	1>***2・3
40 速い						1>*2
41 きれいな		1>*2		2>***1・3	1>***2	1>***3
42 やさしい		1>*2	1>***3	1>*2	1>***2	1>***2・3
43 広い						1>***3
44 すばやい				2>*3		
45 豊かな		1>***2	1>***3			1>***3
47 新しい						1>***3
48 まとまった						1>*3
50 優れている					1>*2	1>***3
51 生き生きとした			1>***2>*3		1>***2	1>***3

1) ① 1: 兄姉のみ 2: 兄弟姉妹 3: 一人っ子 ② 1: 関わりを持った 2: 持たない

③ 1: 好き 2: 嫌い 3: 苦手

2) *: P<.05 ** : P<.01 *** : P<.001

い者よりも得点の高いことが指摘された。従って、本調査結果は鈴木等¹⁴⁾が報告した学生の子どもへの関心度と同胞数や出生順位との間には関連がないとした結果を否定するものである。

子どもと親しい関わりを持ったと感じるか否かの経験の有無では、親しい関わりを持った1年生は8項目に、2年生は22項目に有意差を認

めた。1年生で親しい関わりを持った者は“好きな”“良い”“気持ちの良い”“可愛らしい”“優しい”“きれいな”“豊かな”といった項目の得点が高く、「子どもは可愛い」といった肯定的なイメージを抱いていた。2年生は1年生の項目に加えて“親切的な”“頼もしい”“遅しい”“愉快的な”“おしゃべりな”“責任感の強い”“意

欲的な”“のんびりした”“思いやりのある”“清潔な”“元気な”“幸福な”“楽しい”“速い”“優れている”“生き生きしている”といった項目が追加され、子どもの生き生きとした姿や活動性、そして知識を持って接したことから得られる子どもの特性が表現されていた。この結果は、田淵等¹⁵⁾が小児の実習前後に行った調査結果と類似した点が多く、子どもとの親しい関わりが子どもへの肯定的な感情を強め、さらに子どもの学習を通してその行動特性を客観的に把握するような思考を育てていることが示唆される。

次に、子どもが好きか嫌いかといった学生の情動反応では子どもが好きな学生の得点が高く、1年生では17項目に、2年生では31項目に有意差を認めた。1年生で子どもが好きな学生は、嫌い・苦手と答えた者よりも“静かな”“好きな”“良い”“親切的な”“鋭い”“気持ちの良い”“頼もしい”“愉快的な”“素直な”“可愛らしい”“思いやりのある”“幸福な”“敏感な”“楽しい”“やさしい”“豊かな”“生き生きとした”といった項目の得点が高く、子どもは明るくて素直でやさしい、そして感受性が豊かであるといったイメージを抱いていた。これに加えて2年生では“明るい”“逞しい”“おしゃべりな”“きちんとした”“責任感の強い”“落ち着いた”“意欲的な”“のんびりした”“勇敢な”“優しい”“丸い”“清潔な”“きれいな”“広い”“新しい”“まとまった”“優れている”といった項目が追加され、2年で子どもが好きな学生はそうでない学生に比べて子どもの特性により多く注目し、これらを子どもの行動特性として捉えていることが指摘された。

また、情動反応は他の2つの変数に比べて、1・2年生共最も多くの項目で有意差を認め、学生の好き・嫌いといった情動性が子ども観の形成に大きく関与していることが指摘された。子どもが嫌い・苦手な学生の回答の特徴としては、子どもを好きな学生が捉えている子どもの肯定的な部分を否定的に捉えていたり(例えば、子どもは活動的であることを子どもはうるさいといったように)、また「どちらともいえない」といった回答をする等学生の情動性により子どもへの

関心も大きく異なる子とが指摘された。この結果は、楠木野等が行った子どもに対する学生の接触体験と関心度¹⁶⁾の結果とも一致する。このように、子どもの行動特性の認知やイメージ形成に最も大きく関与するのは、学生の情動反応であり、次いで子どもと親しく関わったと感じている学生自身の経験の有無であった。また1年生と2年生の間に生じたこのような相違は、子どもに関する学習を行ったこと、そしてそれを子どもとの関わりの中で活用した結果、それまでの対象認知の在り方に質的な変化が生じたことを示唆するものであろう。

3. 因子分析による子どものイメージ

そこで、これらの変化を学年別、専攻別に確認するために、因子分析により因子構造の比較を行った。より正確な因子分析を行うために、分散の小さい項目を除外した後に、相関マトリックスの作成を行い、その後バリマックス回転によって5つの因子の抽出を行った。表5は、それぞれ0.45以上の因子負荷量のある項目を取り出して命名し、各因子の代表的な項目の上位3つの平均得点を比較したものである。表から明らかにように養護の1年生は子どもの「新鮮さ」、「感受性」の豊かさを高く評価し、「安定性」を低く評価していた。2年生は「感受性」、「愛らしさ」、「活動性」、「能動性」を高く評価し、

表5 学年および専攻別因子の平均得点

専攻	1年生	平均得点	2年生	平均得点
養護	新鮮さ	5.63	感受性	5.95
	感受性	5.33	愛らしさ	5.65
	積極性	4.93	活動性	5.35
	柔軟性	4.46	能動性	5.05
	安定性	2.85	潔癖性	4.34
看護	愛らしさ	5.50	快活さ	5.70
	逞しさ	4.84	柔軟性	5.11
	柔軟性	4.83	逞しさ	4.20
	感受性	4.31	安定性	3.59
	安定性	2.29	外向性	3.16
保育	感受性	5.64	柔軟性	5.72
	自己中心性	5.07	自己中心性	5.48
	逞しさ	4.56	感受性	5.38
	潔癖さ	4.53	活動性	5.29
	安定性	2.92	安定性	3.29

子どもの動的な因子が追加された。

看護の1年生は子どもの「愛らしさ」を高く評価し、「安定性」を低く評価していた。2年生は「快活さ」、「柔軟性」を高く評価し、「外向性」をやや低く評価していた。子どもの「外向性」が低いとするこの傾向は看護の2年生にだけ見られる結果であった。これは入院生活を送っている子どもに接した経験を持つこの学年に特徴的なものと考えられる。この結果を因子構造の比較ではないが内田等が行った小児看護実習前後のこどものイメージ¹⁷⁾の報告(実習後に学生が大きく変化する項目として、子どもの感情表現の在り方を示す項目、病気を持ちながら生活する子どもへの理解を示す項目、そして子どもの理解力や想像力を示す項目が主なものとしてあげられていた)と比較すると、教育課程は異なっているが、最終的に看護の学生が実習を通して確認する子どものイメージには大きな相違は認めなかった。しかし鈴木等¹⁸⁾は1年生だけを対象とした報告において、教育課程(2年課程と3年課程)の違う学生の接触体験やその内容、そして子どもに対する関心には相違があると指摘しており、今後この点の確認も行った上で教育の方法を考慮することも必要である。

保育の1年生は子どもの「感受性」、「自己中心性」を高く評価し、「安定性」を低く評価していた。2年生では子どもの「柔軟性」、「自己中心性」、「感受性」、「活動性」を高く評価し、「安定性」をやや低く評価していた。このように、保育の学生は早くから子どもの特性を客観的に評価する傾向が見られ、2年生ではこのような視点の広がりの方がより確実なものとなっていることが指摘された。この結果は、小杉等¹⁹⁾が保育の学生に行った入学時と卒業時の児童観の変化を調査した結果とも一致する。

以上述べた因子の比較から、それぞれの専攻において、1年生の段階からすでに異なる子ども観が形成されていることが明らかとなった。しかし、子どもは「感受性」が強く、「不安定な」存在との見方は1年生全体に共通し、2年生ではこのような部分も認めながら、その後の学習によって子どもの特性をより豊かに、そして客観的に捉える視点の広がりが指摘された。

ま と め

同胞の存在は学生が子どもについての基本的な理解を得る上で有益であったが、学生の“子ども観”の形成に最も関係が深いのは、子どもを好きな学生は子どもの特性を肯定的に評価し、嫌いな学生はそれを否定的に捉えるといったように、学生の子どものに対する情動性であった。次には学生が子どもと親しく関わったと感じている経験の有無であった。この点に関しては、特に看護の学生は養護、保育専攻の学生に比べて子どもを「嫌い」と答えた学生が多く、このような学生達に如何にして子どもとのより良い関係を保障し、またそのための学習の準備を行うかが今後の課題である。因子の比較ではそれぞれの専攻において、1年生の段階からすでに異なる子ども観が形成されていたが、看護の2年生は病児と接するためか、子どもの動的な評価が低くなっていた。

文 献

- 1) 野垣義行編：日本の子どもの歴史、現代の子ども、第一法規、1977。
- 2) 山本捷子：小児看護実習における学生の子どもの観の変容に関する一考察、日赤中央女子短期大学研究紀要、Vol.3, pp30~37, 1982。
- 3) 小杉洋子・力富敬子・都築忠義：児童観に関する研究、聖徳学園短期大学紀要、Vol.15, pp1~20, 1982。
- 4) 田淵和子・山本捷子：看護学生の子どものに対する認識や態度に変化を及ぼす実習の影響、日赤中央女子短期大学紀要、Vol.5, pp47~55, 1984。
- 5) 内田雅代・桜井幸・中村美保・兼松百合子・吉武香代子・武田淳子：小児看護実習前、実習後のこどもイメージについて、千葉大学看護学部紀要、Vol.11, (3), pp47~51, 1989。
- 6) 太田にわ・平松昌子・砂田正子・中新美保子・磨家敦子：小児看護実習終了後の小児に対する学生の認識と課題、第20回日本看護学会集録、看護教育、1989。
- 7) Osgood, C. E., Suci, G. J. & Tannebaum, P. H.: The Measurement of Meaning Univ. of Illinois Press. Urbana 1957。
- 8) 井上正明・小林利宣：評価技法としてのSD

- 法の意義とその用い方(その2)—形容詞対の
尺度構成の方法—指導と評価, Vol.31, (10),
pp41-44, 1985.
- 9) 鈴木敦子・山中久美子・藤井真理子: 家族変
動および教育課程の違いからみた本学学生
の子どもに対する接触体験と認識の状況, 大
阪府立看護短期大学紀要, Vol.5, (1), pp79~87,
1983.
- 10) 上揚1)
- 11) 上揚8)
- 12) 繁多進・大日向雅美: 母性, こころ・からだ・
社会, 新曜社, 1988.
- 13) トマス・ゴードン・近藤千恵・中井喜美子:
ゴードン博士の親に何ができるか「親業」,
三笠書房, 1990.
- 14) 上揚8)
- 15) 上揚3)
- 16) 楠木野裕美・鈴木敦子・藤井真理子・吉田智
子・山中久美子: 本学学生の子どもに対する
接触体験と関心度・認識の状況(第2報)—家
族変動と教育課程に焦点をあてた前回との比
較検討—日本看護協会第20回看護教育学会講
演集, 1989.
- 17) 上揚4)
- 18) 上揚8)
- 19) 上揚2)